

認知症の「不思議」！ その行動にはワケがある。

? なぜ & なるほど!

認知症の方を介護をしていると、「どうしてそんなことするの…?」と思うことがよくあります。その行動の理由を知ることで、認知症との向き合い方のヒントになるかもしれません。実際にあった3つの体験談から学んでみましょう。



四万十町HP
(認知症相談)

物を盗られた! 犯人はあんただ!

「財布がない。鞆もない」と言い、通帳は3回紛失。入れ歯も無くした。その度に「孫に盗られた」「お前が盗った!」などと言われてつらかった。

なぜ

- 認知症の行動・心理症状の1つである「物盗られ妄想」。
- 記憶が消えているため、特に見える範囲に物がないと信頼している人を疑ってしまう。

なるほど(例)

- 「見つかるといいね」と共感し安心感を与える。
- 否定せずに訴えを受け止め、話題を変えるなど気を紛らわせることが効果的。

自宅を他人の家だと勘違い!

自分の家なのに「ここは自分の家ではない」と思い、部屋の荷物をまとめて隣の部屋へ移動したり、外へ出て自分の家を探そうとしていた。

なぜ

- 過去に住んでいた自宅の記憶が強く思い起こされる。
- 症状への不安や孤独感から、落ち着ける自宅に帰りたという気持ちが誘発されている可能性がある。

なるほど(例)

- 自宅で落ち着けるよう部屋を安心できる環境に整える。
- 本人が好きだったことなど集中できるものに興味を移す。

何度も何度も確認する、不安のループ!

出入り口の鍵がかかっているかや、火の始末を、昼夜を問わず何度も何度も確認する。

なぜ

- 「鍵をかけた」「火を消した」こと自体を忘れる記憶障害によるもの。
- 「鍵のかけ方」「火の消し方」の一連の行動が正しく完了したと判断できなくなっている。

なるほど(例)

- 「鍵はかけた」「火はちゃんと消したから大丈夫」と優しく声を掛け、不安に寄り添う。
- 一緒に確認しメモに書くなど、本人が行動の完了を実感できるようにする。

記憶はかすんでも、私は私。

認知症と向き合う、自分らしい生き方

好きなことを、今でもできる幸せ

僕は毎朝、新聞の催し物欄をチェックし、絵画や写真、書道の展覧会など行きたいところの目星をつけるのが日課です。そして出かけるときは、デジカメを必ず持参し撮影します。そうすることで、行った先や出会った人を思い出すことができます。その際は妻が運転してくれますが、好きな所へ行っても出かけたこと自体忘れてしまうので、



「何も気にせず遊んで暮らせていいね」と言われてしまいます。あと8年は生きて、100歳までに四国一周のドライブをして行った先々でスケッチしたい。妻も「描きたい所に行ったら、いつでも車で止まっちゃおきね」と言ってくれます。



つかね
武吉 束さん(92歳)

「デイサービス百年荘」が僕の居場所

毎日通う「デイサービス百年荘」での生活が、本当に楽しいんです。僕が行き始めたのは4年前ですが、最初は家から出るのすら恥ずかしかったんです。でもデイに行くようになって、人との付き合い方もうまくなったと自分でも思います。デイの職員さんたちが本当に優しいし、大勢の人と接するので気持ちが朗らかになります。もし家に閉じこもっていたらこんなふうになってはいない、きっと症状が進んでしまっていると思う。デイでの1番の楽しみはカラオケで、十八番は千昌夫の「北国の春」。「廣高さんそろそろ歌いや〜」ってみんなに言われるのを僕は待っているんです。ここが僕らしくおれる居場所です。



ひろたか
林 廣高さん(91歳)



介護の悩み
どうすれば?

頼れる

相談

窓口ガイド

知識・ノウハウ

四万十町地域包括支援センター

認知症について、どこに相談すべきか迷った場合は、まずは地域包括支援センターへご相談ください。相談のほかにも、認知症の症状や対応・支援などをまとめた「認知症あんしんガイド」の配布や認知症を知るための講座も行っていますので、お気軽にお問い合わせください。

お問い合わせ先 /
窪川22-3385 大正27-1212 十和28-5518

お問い合わせ先 / 高齢者支援課 22-3900



経験者同士の交流

認知症の人と窪川家族の会

認知症の方やその家族が思いを語る場で、誰でも自由に参加できます。月1回開催し、介護施設の見学なども実施しています。参加者からは「誰かに聞いてもらうのが1番」「自分の学びのために来ている」などの声があり、有意義な場となっています。

お問い合わせ先 / 22-3385



プロの

介護職の方にも聞いてみました!



社会福祉法人 香南会
グループホームゆうき

よしみ
管理者 辻 好美さん

認知症グループホームは認知症の方々が共同生活を送る介護施設。介護士26年の辻さんは「少人数なので、利用者さん一人一人のケアができるのが強みです」と言います。例えば、認知症の症状のついに「帰りたい願望」というものがあります。帰ろうとする利用者さんに対しては、一緒に外へ出て帰りたい理由をじっくりと聞き、落ち着くまで寄り添います。施設を出て行くとする利用者さんに対しては、名前を呼びながら「帰られると寂しいわ!」と声をかけます。本人の状態や気持ちに合った声掛けと、共感・傾聴の姿勢を大事にし、なじみのある関係を築くことを心掛けています。

「認知症の方の介護はその当事者にしか分からない。よそへの言いづらさという葛藤が絶対あります。でも抱え込んでほしくない」と話す辻さん自身も、仕事と家庭の両方で介護をしていた時期があります。家での介護のしんどさも経験しています。だからこそ、これからは単に施設として存在するのではなく、家で認知症の家族を介護する方々の相談に乗ることも介護のプロとして必要だと話します。「ことも110番の家ならぬ、認知症110番ですね。一人で抱え込まず、ここを駆け込み寺として、地域に開かれた存在になりたいですね」と、今後の展望を語ってくれました。